

## 第1節 新たなネットワークづくりの潮流のなかで

# 丘から広がる、身近な国際交流 ふだん着感覚でつきあいを楽しむ

緑区国際交流協会

「私自身が、外国生活や海外旅行のときにいろいろと親切にしていた、そのお礼にと留学生のホームステイ受け入れなどをしていました。そのうちに、同じくホームステイをしていた友人と、もっと輪を広げてみようかという話になって…」

日常的な感覚で国際交流を進めている緑区国際交流協会の代表、小島康宏さんは会の発足をこう語る。昭和56年5月のことである。7年後の現在、会員数は約120名。うち外国人が約50名を占める。

驚かされるのは、その活動内容のバラエティーに富んでいることだ。62年度の活動から見てみよう。平均して月に1回、サロンのような雰囲気で例会が行われる。4月のお花見が始まって、8月の納涼パーティー、12月のイヤーエンドパーティーといった季節感のある催しがある。7月には、「子供を国際人に育てよう」というテーマでフォーラムや、外国人を講師に招いての異文化勉強会も行われた。また、趣味の会としてテニス、コーラスと料理教室が行われている。

特に、料理教室は毎回好評だ。会員が交代で先生役になって、自慢のお国料理を教えあう。そこでできあがった料理を味わいながら、交流しようというものだ。

「今年は日本料理と、中国、韓国、スペインの

料理をつくりました」と小島さん。

そのほか、来日したばかりの外国人に対するオリエンテーション、日本語教室などを実施しているし、昨今の円高によって苦しくなっている留学生の生活を少しでも援助しようと、リサイクルの会やガレージセールも行われた。

「初めから、こうだったわけではありません。会員がこれをやりたい、これならできると、いうことで始めたものが一つ一つ定着して、ここまで来ただけです」と小島さんは言う。

もうひとつ、これだけ多彩な活動が行われている理由には、この会が緑区を中心とした地域の人びとによって構成されているということもあげられるだろう。緑区国際交流協会の事務局は、田園都市線藤が丘駅近くにあるのだが、この沿線には、海外生活経験者や外国人が比較的多い。また、東京都内で働く外国人とのつながりを持つ人も多い。このような地域特性と、会員の価値観の多様さが、この会の活発な活動を支えていると言えそうだ。

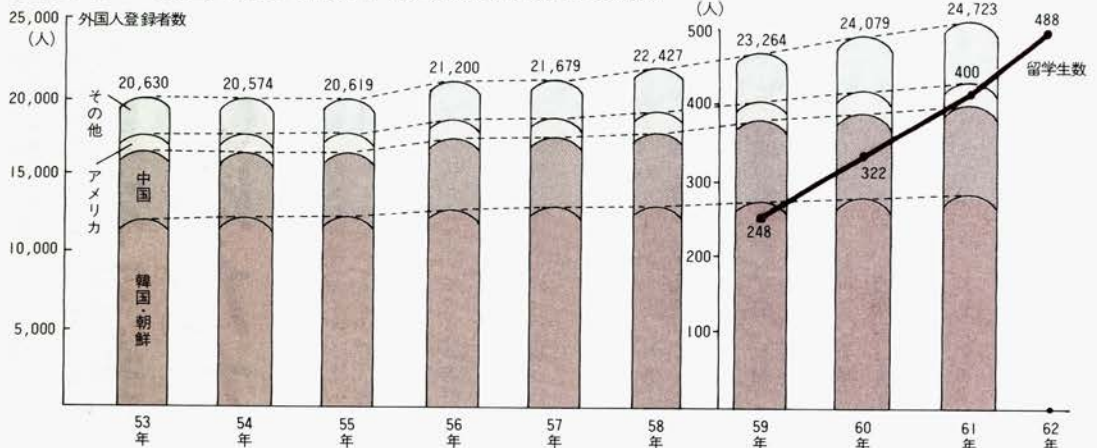


藤が丘駅前行われたガレージセール

「この会では、できるだけ日本語で交流しよう、

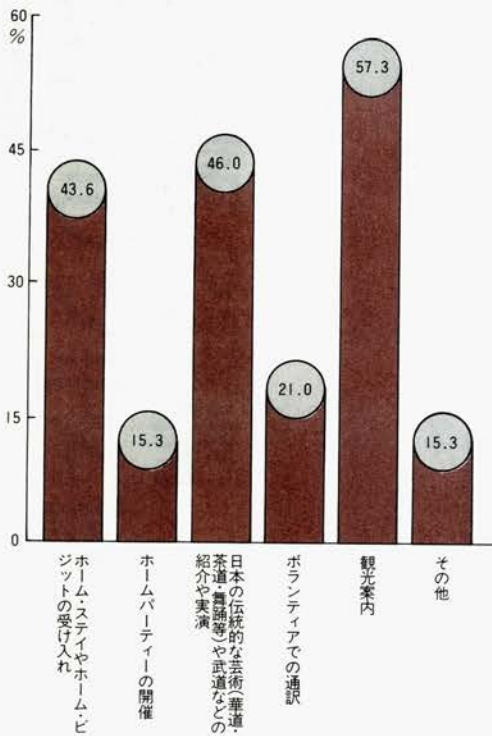
# Network

## ■市内大学への外国人留学生が増加、外国人登録者も増えている



外国人登録者数は各年度末、留学生数は各年5月1日現在 横浜市総務局調べ

## ■外国人観光客の旅行を より良いものにするためにあげたいと思うこと



横浜市 「市政モニターアンケート観光に関する市民意識」(昭和62年度)

と考えています。英語ができなくても国際交流はできるはずですし、日本にきている外国人の国籍だって、いろいろですからね。げんに、この会の外国人会員の国籍を見ても、ゆうに20か国を超えていますよ」

どの国の人も、会員宅にホームステイしたことがあったり、知り合いにたまたま会員がいたりした縁で、この会に参加してきたそう。

「観光地や歴史的な建造物を見ることも、日本を知ることには違いないですが、ほんとうの日本を知ってもらうためには、やはり一般の家庭のなかで過ごすことが、一番なのではないでしょうか」小島さんはそう言う。そこで端午の節句、七夕祭り、お月見、お正月、ひな祭りとい

った日本の伝統行事を、そのときどきに、日本人会員の家に外国人会員を招いて紹介し、一緒に楽しむことも行っている。

同じ考えから、活動のなかでもホームステイの受け入れについてかなり力を入れている。毎年10名近い留学生が、会員の家に滞在しており、今後は、友人のいるサンフランシスコの協会とも協力体制をしいて、短期滞在者対象のホームステイの仕組みを整えたいとのことだ。

「国際交流というのは、決して難しいものではない。だれにでもできるもの。だということ、知ってほしいですね」

国際都市ヨコハマは、海からだけではなく、この緑区の丘からも広がっていくようだ。